概要

# 古麓能寺遺跡
# 古麓城下遺跡

九州新幹線鹿児島ルート建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要

熊本県教育委員会

Copyright by Board of Education,Kumamoto Prefectual Office

図１　現在の古麓町・宮地町の航空写真（2002年３月12日撮影）

図２　16世紀頃の古麓町・宮地町の想定復元（CG加工写真）

# 1 発掘調査地について

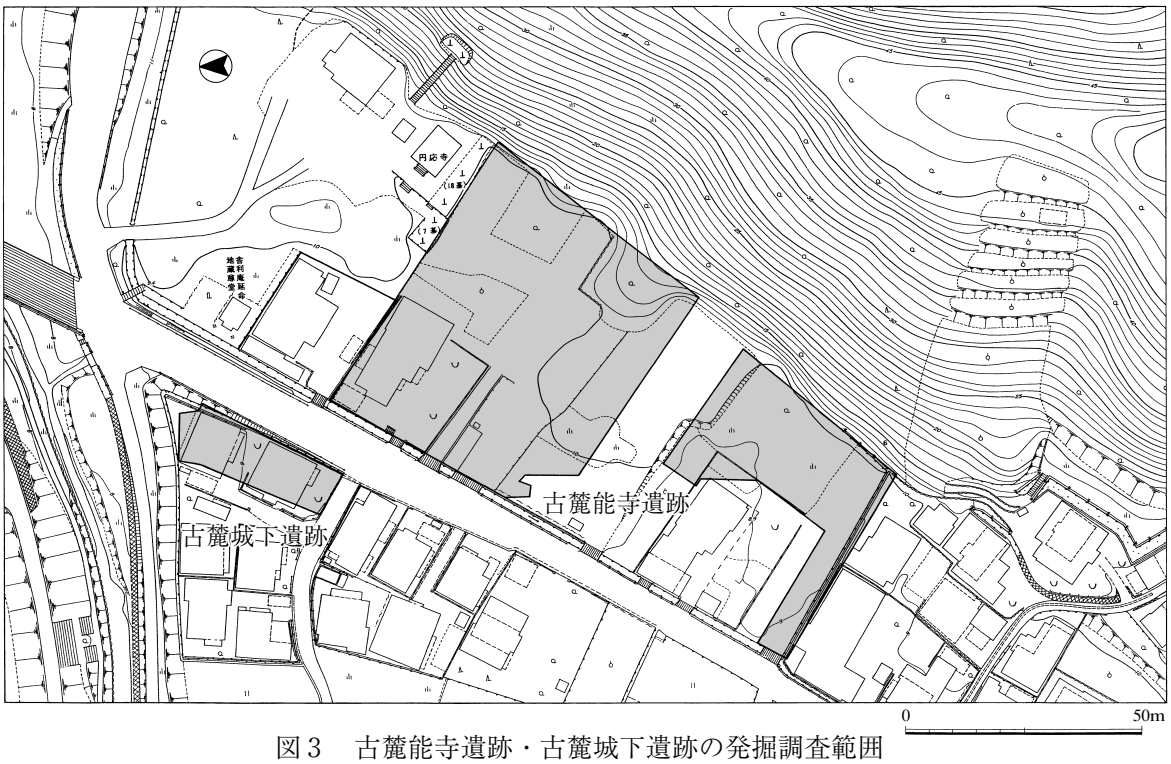


図３　古麓能寺遺跡・古麓城下遺跡の発掘調査範囲

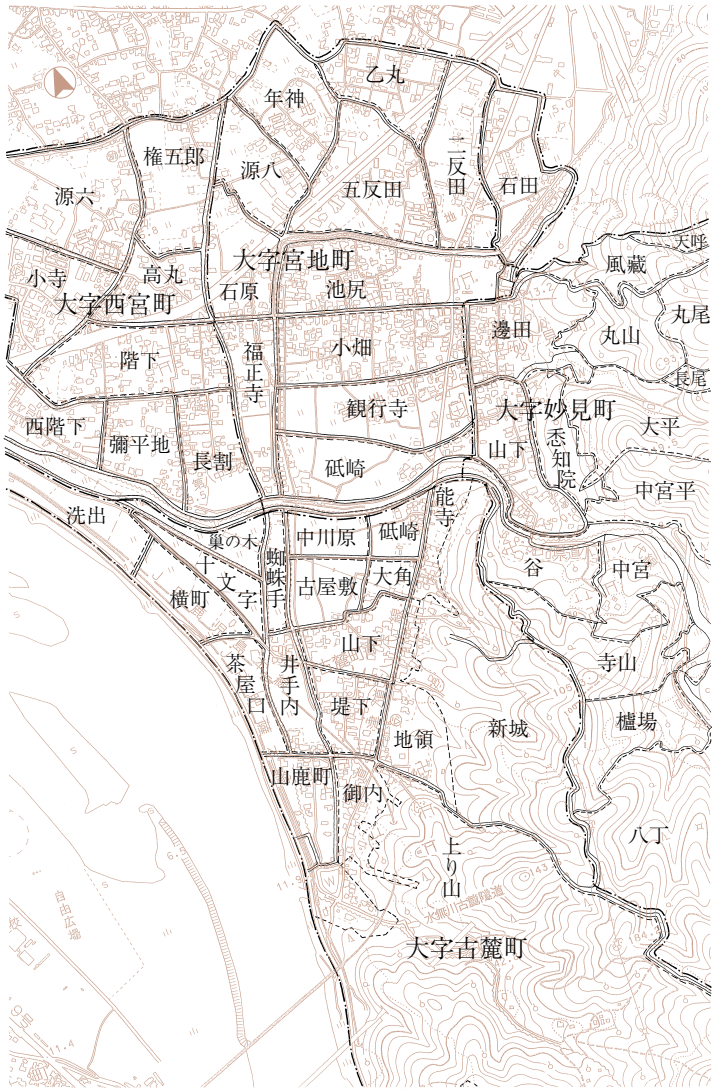


図４　古麓町・宮地町周辺の字図

## (1)　発掘調査の原因

九州新幹線新八代～西鹿児島間は、平成16年３月13日に開通する予定です。この建設工事で壊される部分を、工事の前に調査しました。

古麓能寺遺跡と古麓城下遺跡は、平成13年４月28日から平成14年４月20日まで調査した遺跡です。

## (2)　遺跡の場所

古麓能寺遺跡と古麓城下遺跡は、球磨川の北側、水無川の南岸の八代市古麓町字能寺・砥崎にあります。

ここは古麓山（古麓城跡）の麓で、水無川に向かって緩やかに下がっているところです。

## (3)　調査地の歴史

南北朝時代（1336～1392年）から戦国時代（1467～1568年）にかけて八代地方を治めていた名和氏と相良氏の居城である古麓城の城下町であったと言われています。

# 2　古墳時代後期～平安時代中期の遺構と遺物
## －古代の大規模集落から八代北庄の村落へ－

図５　８世紀の竪穴式住居（古麓能寺遺跡SI01）

### (1)　竪穴式住居

８世紀（奈良時代）の竪穴式住居が２軒見つかりました。

この住居は、地面を四角に掘り下げて床とし、その四隅に柱を立てて屋根を支えた半地下式の住居です。壁の１ヶ所には竈があり、調理をしたり暖をとるのに使われていたようです。

### (2)　貝塚

竪穴式住居の近くから、そこに住んでいた人々が不用な物を捨てた貝塚がみつかりました。

食べ滓であるマガキ・ハマグリ・アサリなどの貝殻や狸の骨などが捨てられており、割れた土師器や須恵器などもいっしょに捨てられていました。

図６　８世紀の貝塚（古麓能寺遺跡SS01）

### (3)　貝塚の貝類

図７のような貝類が見つかりました。上段左からカガミガイ・ハマグリ・オオノガイ・アサリ、下段左からアカニシ・マガキ・イタボガキ・ハイガイ・ヤマトシジミ、右最下段左からサルボウ・オキシジミです。

これらの貝は、真水と海水が交じり合う汽水域と呼ばれるところの砂の多い場所に住んでいます。この付近の当時の環境を知る上でも貴重です。

図７　貝塚から出土した貝類

図８　８世紀の土師器（古麓能寺遺跡・古麓城下遺跡）

図９　底に文字がヘラ描きされた土師器
上段左から「田上」「住」
下段左から「大」「麻呂」と
ヘラ描きされている。

## (4)　土師器

遺跡からは８世紀から10世紀まで（奈良時代～平安時代）の土師器が見つかりました。

土師器は、主に日用雑器として使われた素焼きの土器で、使い方に合わせて甕・坏・高坏・皿・蓋などいろいろな形があります。中には表面が朱く塗られた物や内面が燻され黒いススが付着した物もあり、これらは特別な役割をした土器と考えられます。

また、焼く前に底にヘラで名前か何かの名称を表す文字を刻んだものも見つかっています。

図10　８世紀前半～中葉の須恵器（古麓城下遺跡）

## (5)　須恵器

土師器と共に、６世紀末から９世紀まで（古墳時代～平安時代）の須恵器も見つかりました。

須恵器は、窯を使って高温で焼かれた灰色の土器で、これも主に日用雑器として使われました。使い方に合わせて大甕・長頸壷・短頸壷・小壷・坏・高坏・皿・蓋・円面硯などがあります。

これらが作られたところは、主に宇城窯跡群（松橋町・豊野町・中央町・城南町一帯）ですが、荒尾窯跡群（荒尾市）のものもありました。

図11　８世紀後半の荒尾窯跡群産の須恵器（古麓城下遺跡）

# 3　南北朝時代～戦国時代の遺構
## －中世の城下集落から戦国期城下町へ－

図12　中世遺構配置図（古麓能寺遺跡）

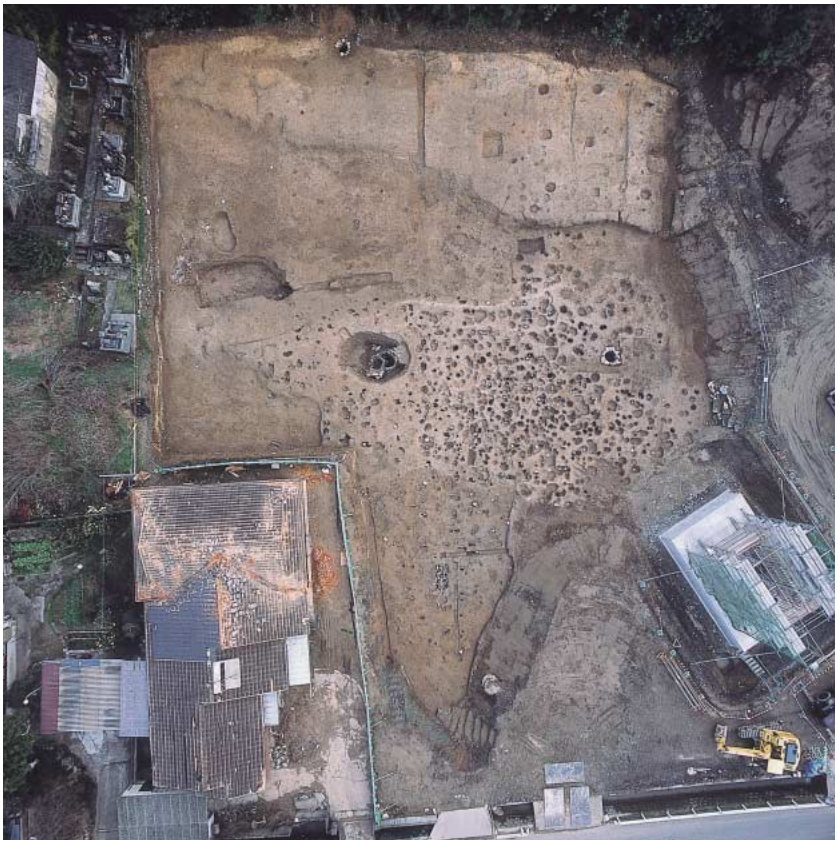

図13　中世遺構完掘状況（古麓能寺遺跡）

### (1)　建て替えられた建物

古麓能寺遺跡からは、建物跡（柱を地面に埋めたものと柱を礎石と呼ばれる土台石に載せたものがある）が43棟と柵列が38列見つかりました。また石組の井戸が６基、墓穴が２基、用途不明の穴が４基見つかりました。

これらの建物は重なり合っており、同じ場所に何度も（最大６回）建て替えられたことがわかります。

### (2)　火事にあった建物

建物の礎石の中には焼けて赤黒くなったり、割れたものもありました。このことから建物が火事にあったことがわかります。また焼けた壁土や割れた礎石を埋めた穴も見つかりました。

## (3)　掘立柱建物

地面に穴をあけて柱を立てた建物を掘立柱建物と呼びます。

全部で24棟見つかっており、柱の間隔は1.8m～2.0mであったことがわかりました。庇や縁側を持つ建物や、廊下や座敷の間取りのわかる建物もありました。

図14　掘立柱建物（古麓能寺遺跡SB08）

## (4)　柵列

柱穴が並んだ柵列を掘立柱柵列と呼びます。これらは建物の周りを囲んだり、区画したりするため、設けられたものです。

柱穴の底に川原石を１～５個くらい敷いたもの（礎板と呼ぶ）もありました。これは柵の重みで柱が沈むのを防ぐためと長さの違う柱材の天端を揃えるために置かれたものと考えられます。

図15　礎板のある柵列（古麓能寺遺跡SA33・38）

図16　石組井戸（古麓能寺遺跡SE06）

## (5)　井戸

川原石を積み上げて作った石組の井戸が６基ありました。

壊れにくくするため、井戸の底に近いところには大きな石、上の方にはやや小さな石を積んでおり、水が濁らないように底には石を敷き詰めてありました。

なお４基の井戸は不用になってから、わざと壊してありました。

# 4　南北朝時代～戦国時代の遺物
## －海上交通の港として栄えた八代－

図17　古麓能寺遺跡・古麓城下遺跡から見つかった輸入陶磁器と国産陶器

## (1)　輸入陶磁器と国産陶器

13世紀から16世紀までの輸入陶磁器（中国や朝鮮半島産）が多数見つかっており、ほとんどは龍泉窯系青磁・景徳鎮系染付・中国白磁でした。その他同安窯系青磁・福建省系陶器・漳州窯系染付・磁州窯系陶器・朝鮮王朝系白磁・高麗象眼青磁なども少量ありました。国産陶器は、常滑窯系陶器・備前窯系陶器・美濃窯系陶器があり、瀬戸内海から海路を通じて運ばれて来たと考えられます。

図18　龍泉窯系青磁・景徳鎮系染付と茶臼・茶釜（古麓能寺遺跡）

## (2)　高級品と日用雑器

輸入陶磁器の盤や碗などと共に、お茶の道具の茶釜や茶臼も見つかっているので、生活の裕福な人々は茶の湯を開いて楽しんでいたことが想像されます。

一方、羽釜や擂鉢などの調理具も見つかっています。その他火鉢や土師質の灯明皿なども見つかっており、中世の日常生活のようすを知ることができます。

図19　瓦質土器の羽釜（古麓能寺遺跡）

## (3)　近世以降の遺跡周辺

小西行長が球磨川河口の麦島に城を築くと町も移転し、この地は「町」の役目がなくなりました。近世よりあとにはこの付近は「古麓村」と呼ばれ、田畑になっていたようです。

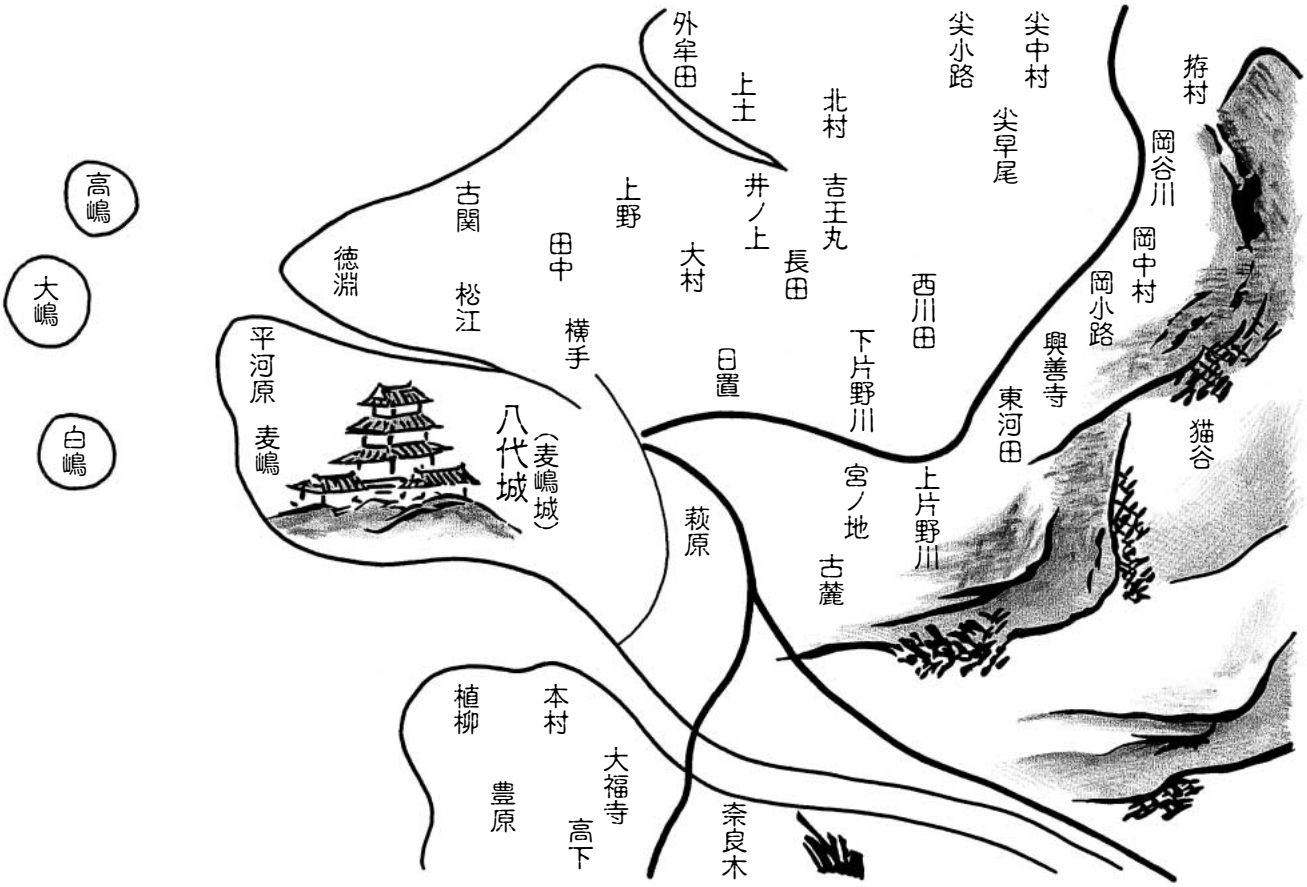


図20　慶長10（1605）年頃の古麓村（「慶長肥後国絵図」の八代周辺をスケッチ）

概要

# 古麓能寺遺跡
# 古麓城下遺跡

発行年月日　平成15年10月31日
編集・発行　熊本県教育委員会
〒862－8609　熊本市水前寺６丁目18番１号
印　　刷　白木メディア株式会社

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 216 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 古麓能寺遺跡 古麓城下遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/